

---

ンタが家にやってくる Santa Claus is coming to my home

正木 慶史

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

サンタが家にやってくる Santa Claus is coming to my home

### 【Nコード】

N6826P

### 【作者名】

正木 慶史

### 【あらすじ】

クリスマス・イブの晩、突如部屋に乱入してきたのはサンタの格好をした同級生だった。

職業：サンタクロースだが常識人な高校生と、同級生の変人一家が繰り広げる一幕。

会話文オノリーのコメディ風味な何か

## （前書き）

初投稿です。至らないところもありましたが、そこは生暖かい目で見守っていただいてこの駄作を鼻で笑ってくださいれば幸いです。

「メリークリスマス！こんばんは。サンタクロース…だ…」

「よう、こんばんは。というか久し振り、西口。3日ぶりだな」

「な、なんで香川がここに！？」

「なんでと言われてもここは俺の家だしな。居ちゃ悪いか？」

「で、でもお前は自転車通学だったろ？ここ県外じゃ…」

「ああ俺普段アパートで独り暮らしして高校通ってるんだわ。

で、長期休暇はこうして実家に帰って来てるってわけだ」

「な、マジか！くそ…県外なら知り合いはいないだろうと思ったのに…」

「よくわからんがお気の毒様。まあ茶ぐらいは出してやろう」

「ああ、ありがとう。ってなんでクリスマスに煎茶と煎餅なんだよ

…」

「おれの家神道だからな。キリストの誕生日とかぶっちゃけどうでもいい」

「そんな宗教的な理由！？」

「あとケーキなんて甘ったるい物がちゃんちゃらおかしくて食えやしない。というより生まれてこの方ケーキという物を食ったことがない」

「なにそのケーキに対する嫌悪感！？」

「いや嫌いなんじゃなくてただ性に合わないだけだ。多分血なんだろうな。俺の妹も見た目天使みたいに可愛らしいのに、三歳の時には昆布茶を嚙ってさきいかをかじってたからな。しかしこんな妹で彼氏が出来るんだろうか？西口どう思う？」

「知らないよ！家庭の悩み相談をするな！」

「いやでもさ、好きなタイプは？ってきいたら、38歳以上で人生の酸いも甘いも味わって来た人っていうんだぞ。そりゃあ心配にもなるわ」

「うん、まあタイプはその人の趣味だから…」

「とはいえ今はもっと大事なことがあるんだがな」

「うん、なんだ？」

「サンタの格好をしている同級生が部屋に乱入してきた場合には警察を呼ぶべきか黄色い救急車を呼ぶべきか、という問題」

「俺か！俺のことか！」

「他に誰がいる。さあさつさと弁明なり釈明をしろ」

「くそつ、なんで俺がこんな目に…ああもう、俺はサンタクロースでこの家にプレゼント届けに来たんだよ！これで良いだろ！」

「うーん、我が家に統合失調症の患者が居ますって119に電話しても救急車来るもんなのかな」

「全然信じてくれてない！」

「当たり前だ。逆に聞くが普通そんなこと言われて信じるやつがいるか？」

「うつ、それはそうだが…信じてくれ！」

俺は父親がフィンランド人で、父さんがやってたサンタクロースの仕事を継いだんだ！」

「えつ、お前って外国人だったのか？」

「名前と外見見ればわかるだろ。名前は西口・シベリウスだし、髪は日本人の母親と同じ黒だけど目は青だろ」

「はー、そうだったのか」

「入学式の時に言っただが」

「ああすまん。多分その時寝てた。しかしお前がフィンランド人だとしてどこにお前がサンタクロースだという証拠があるんだ？」

「うつ、それは…じ、じゃあ表にトナカイを停めているからそれを見てください。それなら証拠になるだろ！」

「うーん、そのトナカイって今小学生に石を投げられてるあのトナカイか？」

「マジか！大丈夫かディック！」

「あのトナカイってディックって名前だったんだ」

「うっ、最近のガキはなんでこうも…プレゼントやらんぞ」

「おつかれ。どうだった」

「いやディックを助けようとしたら俺も小学生に石を投げられて、その上そいつに“若作りサンタ”って言われた…」

「ふーん。でトナカイはどうした」

「ちよつと遠くの山に停めてきた。少し歩くけど背に腹は変えられない…」

「そうか、お疲れ。外は寒かっただろう。コーヒーを淹れたから飲むか？」

「ああ、貰うよ。…ってなんでそんなに態度が変わってるんだ？」

「いやお前がサンタクロースだって分かったからな。サンタが来たというのに何のもてなしもしないとあっちゃあ香川一族の恥だ。という訳で歓迎させてくれ」

「うん。ってなんか面映いな…／＼／」

「で、仕事は良いのか？忙しいんじゃないのか」

「いや、俺はまだ新人だからな。仕事が少なくてこの家で最後なんだ」

「ふーん、じゃゆっくりしてってくれ。家族の者も歓迎したがっているから」

「ああそうさせてもらう…って家族！？」

「あら、秀ちゃん。皆が揃ってから入って驚かそうと思ったのに」

「ちゃん付けするな母さん。ああ西口。これが母親」

「どうも、西口くん。秀の母の薫です。あと秀ちゃん、これって言い草は何なのかなー？」

「ははは母さん、チョコレートスリーパーはちよつときついんじゃないかな」

「だ、大丈夫か、香川！」

「大丈夫ですよ兄さん。あれが母さんと兄さんのスキンシップで

すから」

「そ、そうか。って君は？」

「次男の奏太です。いつも兄がお世話になってます」

「いえこちらこそ。というか君話し方が大人びてるね。何歳？」

「12歳です」

「12歳ってことは…小6？うわ、さっきの小学生に見習ってほし  
いな」

「え？なにかあったんですか？」

「いやさっき表で小学生の女の子に“サンタ狩りじゃー”って襲撃  
されたんだ」

「もしかしてその女の子髪を後ろでひとつに結ってませんでしたか  
？」

「たしかそうだったような…」

「ならすみません。それ僕の幼馴染みです。あとでたっぷり“オシ  
オキ”しておきますので許してやってください」

「過ぎたことだからいいけど。というかお仕置きのところで妙なニ  
ュアンスが入ったんだけど俺の気のせい？流血沙汰はちょっと…」

「いえ、暴力なんか使いませんよ。ただ一晩中ベッドの中でカラダ  
に教え込ませるだけですから」

「そっち方面なの！？」

「だって華ちゃんがいけないですよ。襲撃とはいえ他の男と関わ  
ったりなんかして。彼女には僕しかいないってことを一晩中愛し合  
って体に叩きこんであげなきゃ。あ、大丈夫ですよ。ちゃんと避妊  
はしますから。まだ僕たちは若いから子供ができたからといって結  
婚は出来ないし、僕だけでは子供の養育もできませんからね。とは  
いえ大学卒業したらすぐさま入籍するつもりです。それまでは女子  
校に入れて、他の男どもからは遠ざけますけどね」

「へ、へえ。なかなかいい人生プランだと思うよ…」

「という訳でお兄さん。華ちゃんに変な気なんて起こさないで下さ  
いね。じゃなきゃ……埋めますよ」

「だ、大丈夫！そんな気は一生起こさないから！」

「なら良かった。それなら僕とお兄さんは良い関係を築けますね。あ、そういえば紹介するの忘れてました。あそこでうずくまってるのが姉の由梨です」

「？どうしてうずくまっているんだ？」

「いや、どうも……」

「サンタが……サンタクロースが白髭のおじいさんじゃなかった……」

「どうも姉さんは自分好みのサンタが来ないのがショックだったみたいなんです」

「どうしてなんですか！普通サンタは太ったおじいさんじゃないですか！こんな若いサンタなんてどこにニースがあるんですか！私はおじいさんサンタを要求します！」

「いや、残念だけど僕が来なかったとしても、他の若いサンタが来るだけでおじいさんのサンタは来ないよ」

「！？どうして……ですか？」

「フィンランドとかの北欧がみんながイメージしてるようなおじいさんサンタで、ヨーロッパとかのキリスト教国がオジサンサンタ。そして日本なんかの非キリスト教国には俺たちみたいな若いサンタが訪れる決まりになってるんだ。我慢してくれる？」

「……ということはおじいさんサンタは存在するんですね？」

「ああ、本国と、日本の支部に何人かいるね」

「なら良いです。あ、私中学三年の由梨です。いつも兄がお世話になっております。」

西口さん、今後ともよろしくお願いしますね。そしてあわよくば日本支部のおじいさんサンタと会わせて下さい。お願いします」

「あ、ああ。機会があったらね」

「なんだ、もう下の二人と挨拶したのか」

「あ、秀。大丈夫だったのか？クビ」

「ああ、一瞬黄泉の国が見えたけどなんとか踏みとどまった。つかなんで下の名前を読んでるんだ？」



「いや、みんな香川だから名前で読んだ方がいいかなとおもって」  
「そういえばそうだな。じゃあ俺もお前を名前で呼ぶか？」

「いや俺の場合名前がシベリウスで長くなるからそのまま西口でいいよ」

「そうか。ところで西口、もう１１時３０分過ぎてるんだが時間大丈夫なのか？」

「あーいけね。１２時３０分に先輩と合流しなきゃいけなかったんだ。先輩怒ると怖いんだよな…」

「それは引き留めたりして悪かったな」

「いや大丈夫。仕事するくらいの時間はあるから。じゃあ今からプレゼント渡すよ。ええと。おっこれだな。はいこれが奏太君の」

「えっ、僕何もサントさんに頼んでませんよ」

「プレゼントはその人が一番欲しがっているものなんだ。だから頼んでなくても貰えるんだよ」

「へえ、そうなんですか。あっ、これ最近欲しかったものです。一番じゃないけど」

「あれ一番じゃないの？おかしいな」

「はい、僕の欲しいもののランキングは１番から１０番まで全部華ちゃんで埋まってますから」

「へえ、そ、そうなんだ。で何を貰えたんだい？」

「“イイモノ”ですよ。じゃあいまから華ちゃんと試してきますね。失礼します」

「うん、さよなら…なあ秀。あれつてに…」

「まあ完璧に小学生が持つてて良いものじゃないだろうな。華ちゃんも可哀想に」

「…まあ気を取り直して次にいこつか。由梨ちゃん、はいプレゼント」

「ありがとうございます。あの、早速開けても良いですか？」

「ああ、開けてごらん」

「じゃあ失礼して…あっ、これ最近欲しかったけど高くても買えなか

った本です！嬉しいなあ」

「へえ、なんて本なんだい？ “世界偉人集”？」

「はい、かつこいいオジサマたちが活躍する夢みたいな本なんです  
よ！すみません、ちよつと部屋で読んできますね。さようなら」

「嬉々として去っていったな…」

「本当に彼氏出来るんだろうか？ちよつとお兄ちゃん心配」

「じゃあ最後は秀だな」

「うん？高校生なのに貰えるのか？」

「基本18歳以下に渡すことになってるんだ。だから秀の分もある  
よ」

「えー、お母さんは貰えないの？ちよつとショックだわー」

「良い大人がサンタからプレゼント貰おうとするなよ。みつともな  
い」

「ゴメン、秀ちゃん。私耳が遠くなっちゃったみたいなの。もう一  
度言ってくれる？」

「お母さまがお美しくて素晴らしいお方だと申しただけですよ。だ  
からアイアンクロ は止めて。お願い。顔がめげる」

「大丈夫か秀！」

「ああ、大丈夫。少し頭がへこんだがな」

「そうよー。ちゃんと加減もしたから大丈夫よ」

「…秀、これがプレゼントな」

「おお、これはありがたいな」

「何を貰ったんだ？」

「胃薬一年分」

「…苦労してるんだな、秀」

「いやいや、これでも今日はまだマシな方だぞ」

「そうそう、今日は仕事でお父さんがいないし、西口くんも居たか  
らみんなそこまでハメを外してないからね」

「そうだったんですか。って時間だ。そろそろ帰らなきゃ先輩に怒  
られる」

「そうか、もうそんな時間か」

「あら、もうお別れなの？ 悲しいわ」

「そうですね… あっ、じゃあ最後にプレゼントを一つ。僕が帰った窓から外を見てみて下さい。じゃあ秀、また年明けに！」

「ああ、今度は学校で。またな！」

「…帰ったわね」

「そうだね、母さん。そういえば最後にプレゼントがあると言ってたな。確か窓から外を見るとか…」

「あら」

「おお、雪だ。今日は降らないって予報だったはずだが」

「ホワイトクリスマスなんてなかなか風流な贈り物ね」

「うん」

「…これは私へのプレゼントになるのかしらね。私プレゼント貰ってないし、最後に西口くん私にこれを言っただけだから」

「…母さん、誰へのプレゼントとか考えないで、もう少し子供に感慨とか感傷とか持たせてくれよ…」

（後書き）

ヤマなしオチなしそれに地の文が無くて見づらいというヘレン・ケラーもびつくりの三重苦。作者の文才の無さが見え隠れします。

以下キャラ設定などちよつとした付け加え

西口・シベリウス

サンタ・フィンランド人・苦労性な常識人の3言で片付く高校一年生。

美形、成績優秀、運動神経抜群とまるで少女マンガのテンプレだが生来の運の悪さがにじみ出てあまりもてない。

香川 秀

香川家長男。家庭では妹と弟、両親の暴走を抑える比較的常識人。しかし自分が気に入った人物をからかって遊ぶ悪癖がある。西口とは親交はなかったがこの件をきっかけに親友になる。

香川 由梨

香川家長女。男は30超えてから、が信条の美少女。好きな髭のタイプはふんわりもさもさ口ひげ。好きな人は今のところシャルルマニユ。理由は有り余るほどの貴禄と顎鬚。

香川 奏太

香川家次男。幼馴染を溺愛する腹黒鬼畜ショタ。最初はもうちよつと常識人になる予定がこんなことに。プレゼントのイイモノは、説明した瞬間この小説にR-15タグがつくような物。

香川 薫

香川家母。子供への愛情表現はアイアンクローな奥様。いつもはおしとやかだが無礼な発言には制裁をかます大和撫子。

#### 語句説明

めげる

広島弁で壊れる的な意味の言葉。使った意味は特になし。

サンタ狩り

子供たちの間でいま最も熱い遊び。サンタの袋の奪取を目的とする。

ここまでお付き合い頂きありがとうございます。

「こんな駄文読むくらいなら寝てたほうがまだ」、「こんな文章をいけしゃあしゃあと世に出せる作者の厚顔っぷりに驚いた」など思わず、すこしオブラートに包んで感想、批判を下されば作者は死ぬほど喜びます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6826p/>

---

サンタが家にやってくる Santa Claus is coming to my home

2010年12月24日02時10分発行